

氏名	崔元碩 (ちえ うおんそく)
学位の種類	博士 (文学)
報告番号	甲519号
学位授与年月日	2019年3月31日
学位授与の要件	学位規則 (昭和28年4月1日 文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	伝統物語の系譜学——内村鑑三物語の解体と再創出——
審査委員	(主査) ゾンターク・ミラ (立教大学大学院キリスト 教学研究科教授) 廣石 望 (立教大学大学院キリスト 教学研究科教授) 久保田 浩 (明治学院大学国際学部教授)

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

凡例

序論

- 1 研究の動機
- 2 太田雄三と筆者の見解の差
- 3 内村と日本伝統
- 4 研究方法
- 5 本論文の構成
- 6 *HIBC*の紹介

第一章 『余は如何にして基督教徒となりし乎』と「伝統物語」の比較分析

- 第一節 本研究の概念の検討
- 第二節 伝統物語の検討
- 第三節 伝統物語の分析
- 第四節 父と四書五経の定着、そして創設神話
- まとめ

第二章 『余は如何にして』の分析

- 第一節 *HIBC*と『余は如何にして』
- 第一節 自伝解体のための準備
- 第三節 文学理論による作者問題
- 第四節 神話化作業による『余は如何にして』の自伝化
- 第五節 教祖の誕生
- まとめ

第三章 宗教団体法（1939年）と内村物語創出の背景

- 第一節 伝統物語が創出された背景
- 第二節 「日本的基督教」を巡る論争
- まとめ

第四章 教祖内村像の構築に関する考察

- 第一節 内部、外部における内村の評価
- 第二節 第二期無教会集団による教祖像の構築
- 第三節 教祖物語の考察

第四節 第二期無教会内部の考察

総論

資料

参考文献

(2) 論文の内容要旨

本論文は内村鑑三(1861-1930年)の人物イメージの構築に決定的な影響を及ぼした様々な物語——具体的に言えば(1)伝統物語、(2)反伝統物語、(3)預言者物語(正統物語)と(4)第二預言者物語と分類される多様な「内村物語」——を分析および考察の対象としている。上記4種類の物語にはそれぞれの提唱者として代表的な著者が想定されているが、論文の主眼は、物語とイメージを構築する集団、その集団が物語構築のための根拠として提示し、独自に解釈している資料(内村鑑三著の*How I Became a Christian*、略:HIBC)、また当該の集団が置かれている状況、つまり物語やイメージ形成に重要な要素・モチーフを提供する時代背景、そして提示された物語やイメージの管理・統制方法の追跡と分析にある。本論文は、4種類の物語群の中で特に(1)伝統物語の形成に注目し、それは内村没後、——本論文では「第二期無教会集団」と呼ばれる——内村の継承者たちの間で、宗教団体法制定(1939年)に向かうプロセスとそれと密接に繋がっているとされる「日本の基督教」の流行という文脈において構築されたとする。本論文はさらに、無教会信仰の継承者の間で構築された伝統物語は、内村研究に取り組んでいる研究者たちによって内村の幼年期に関する「資料」として重宝され続けていることを指摘し、これまでの内村研究の学術性に疑問を投げかける。

伝統物語の系譜学を明らかにするために、まず序論において本論文の基本概念(系譜学、神話、会社神話などに対するB.リンカーンとR.バルトの定義)とその諸相(他概念との区別、注目すべき点)が説明された上、F.ニーチェ『*道徳の系譜学*』が本論文の分析の手本とされる。そして本論文の系譜学的な研究もまた、それ自体が新しい物語を構築せざるを得ないという意味で、これまで内村の継承者および研究者が進めてきたゲームに参加することであると指摘される。

第一章では、1935年以降に創出された伝統物語に貢献したと考えられる様々な資料を検討し、儒教と四書五経または武士道教育を強調する幼年期の記述などの主要なモチーフに従ってA~D群に分けて、それらの資料と内村鑑三著のHIBC(と『*余は如何にして基督信徒になりし乎*』という邦訳)との関係、また『*余は如何にして基督信徒になりし乎*』以外に伝統物語の基盤とされた資料を検討する。その結果、伝統物語が歴史的な内村の記述ではなく、第二期無教会集団の維持のために創出された教祖物語であることが明らかになる。また一

般的に個人史として読まれる内村の伝統物語が、集団体制のための物語であったことを示すために、伝統物語の諸相が『金日成伝』と比較される。

第二章では、内村の「自伝」とされてきた *HIBC* と『余は如何にして基督信徒になりし乎』を文学理論を用いて分析し、その自伝としての価値を解体し、同書が包含している多様性を提示する。そして、自伝の中に「作者」を探ることが不可能であることを、*HIBC* とその他の内村文書を比較しながら証明する。『余は如何にして基督信徒になりし乎』には、宗教団体制定によって提起された「日本的基督教」の定義が投影されているのである。また、*HIBC*、*Diary of a Japanese Convert*（同書別版の題目、略：*DJC*）、『余は如何にして基督信徒になりし乎』の作者名の変化を追跡しながら、通常自伝に見出される「原因と結果の関係」の創出過程を考察する。

第三章では、宗教団体制と内村物語（とりわけ伝統物語）の創出背景を探り、宗教団体制が制定されつつある中、主流キリスト教会と第二期無教会集団の間に交わされた論争の主題としての「日本的基督教」に注目し、「日本的基督教」というイデオロギーが伝統物語に反映されていることを検証する。また、その他の内村物語に頻繁に登場する W.S. クラークへの言及（クラーク物語）の意義とその創出過程を検討することによって、伝統物語が内村についての歴史的記述ではないことが改めて明らかにされる。

第四章および結論では、無教会内部の論争として内村の「教祖」としてのイメージをめぐる第二期無教会集団の論争を分析する。第二期無教会集団の中に存在する諸グループはそれぞれに異なる内村イメージを前面に押し出しており、統一的な内村像が彼らによって共有されていないことを示し、各グループの解釈を考慮するとき、内村像も多様性を包含していると見るべきであると指摘する。教祖像の確立過程における内村関連著作の検閲作業、または本論文の一つの出発点であった太田雄三著の『内村鑑三』に対する反応を検討し、そして、*HIBC*、*DJC*、『余は如何にして基督信徒になりし乎』と同時に内村鑑三著『基督信徒のなぐさめ』を自伝として受け入れる預言者物語の創出者にも視野を広げ、L. ウィトゲンシュタインに倣って、内村鑑三物語の創出というゲームの完成者は誰であることを考察する。

II. 論文審査の結果の要旨

(1) 論文の特徴

本論文を内村鑑三研究という領域に位置づけるならば、その特徴は取り入れられた方法論の斬新さ、および検証の正確さと精密度にある。適用された方法論と、その基盤となっている理論そのものはとりたてて斬新ではなく、むしろテキスト批評、言説または物語分析、教祖研究として、記号学、思想史や宗教学においてすでに古典的と言えるが、それが学際的な試みとして内村鑑三と無教会という研究対象に適用されたことが画期的である。それによってこれまでの内村研究で見逃され、あるいは意図的に無視された事情を発見することができた。

歴史的人物としての内村ではなく、内村自身とその周辺の人々が作り上げた内村像のみに注目することで本論文は、内村の著作に対する、「作者」を括弧に入れた読解および解釈の可能性を提示する。同時に本論文は、内村の没後に創出される内村物語の構築過程における第二期無教会集団による内村文書の読解と解釈のあり方に考察を集中させることで、狭義の内村研究を超越し、新宗教運動としての無教会を「想像の共同体」(B.アンダーソン)として描き、またそれによる「教祖」ないし「伝統」などの物語創出を——日本キリスト教史研究においても益々注目される——十五年戦争期における主流キリスト教と傍流キリスト教との対立構造において、つまり強弱の力関係に左右される言説として捉えている。また、1930年代に新聞・雑誌を媒体に行われた主流キリスト教界との論争の分析は、無教会史や近代キリスト教ナショナリズム研究としてのみならず、近代メディア研究の消息としても非常に興味深いものである。このように本論文は多数の研究領域との接点を持ち、さらなる展開の可能性を含んでいる。

以上をまとめると、先行研究を真剣に受け止めない傾向が散見される内村研究という分野にあって、本論文は伝統物語の創出という視点に限ってではあるが、多種多様で膨大な一次資料と先行研究を駆使し、研究者自らも〈語り部〉になることを意識しながら分析を進めた結果、重層的な内村物語および従来の内村研究への読み応えのある批判的吟味を提供することに成功している。他方で、将来の内村研究がどのようにして物語創出を回避できるのか、あるいは回避すべきであるか否かについては、本研究は結論を保留している。

(2) 論文の評価

上に示された本論文の特徴は、その強みとして高く評価された。本論文の後半では、幼年物語を生み出した無教会関係者の動向、政治的思惑(キリスト教界内での権力争い)、思想(日本的伝統への向き合い方)、家族関係(『内村鑑三全集』の编者たちのもの)、時代背景(特に宗教団体の法の制定)などが、丁寧に記述されている。もっとも、これらの詳細な記述は、前半での「作者の死」の宣言とは微妙な対立関係にある。すなわち前半では、著者は内村文書を「作者」の歴史的事実を方法論的に括弧に入れて読むことを提案するが、後半で第

二期無教会集団の物語創出を分析する際には、個人と共同体の歴史的な文脈こそが分析の基盤とされ、実証的な検証を追求する。その限りにおいて、文学理論と歴史記述学の併用については、なお方法論的な検討の余地がある。それ以外にも、本論文は——狙いと方法において聖書学における高等批評と類似する——徹底的に学際的なアプローチによって従来の内村研究に果敢に挑戦しており、そのこと自体は高く評価されるが、それぞれのアプローチの方法論的前提に微妙な差異がある場合、それが論述に影響を与える可能性がある。したがって諸領域から採用された複数の方法論の間の理論的な関連づけをさらに推し進め、概念定義に関しては、「物語」と「神話」あるいは「イデオロギー」との区別、*Mythos* または *Mythologie* としての「神話」と「神話化 *Mythologisierung*」の関係などを明確化することで、また歴史的評価に関しては、宗教団体制定が与えた影響をさらに精査し、無教会の「日本的基督教」という自己主張の系譜を1930年以前に遡って解明することなどによって、本論文は、学界にさらに重要な知見を提供するものとなるであろう。もとより以上の諸点は、本論文の本質的な成果と意義を損なうものではなく、今後は本研究の豊かな成果を土台に、著者のみならず無教会関係者、その他の内村研究者による新しい研究が開花することを期待したい。以上を総合して、本論文は、博士学位論文としての価値を有するものと判定される。